

言葉との葛藤

阿部完市「わが《イメージ論》」にみる一句の生成

福田浩之

はじめに

戦後に活躍した俳人たちのなかにあつて、阿部完市は、《ローソクもつて
みんなはなれてゆきむほん》、《たとえば一位の木の木のいちいとは風に揺られ
る》《ほんとうにやまめかるくてかくれてく》といった句にみられるとお
り、その独特の韻律のもとに、「写生」とは異なるひとつの俳風をなした⁽¹⁾。
その完市の俳論に、「わが《イメージ論》と題された一篇がある。この論
は、一九七〇年（昭和四五年）一〇月の『俳句研究』を初出とし、その後、
一九七五年（昭和五〇年）に出版された著者の俳論集、『俳句幻形』に、は
じめの一篇として収められている。

完市の論は、俳句におけるイメージということを正面から扱った理論的
文章のひとつとして特筆に値するが、その術語の用法がやや特異なことや、
断章形式の記述ゆえに、その理路には捉えにくいところも少なくない。本論
は、まず完市の論における主だった語の定義と運用をたどりながら、その手
続きを通じて、完市の論における内的な論理を再構成する。後述するとおり、

「わが《イメージ論》には、部分的に論理の飛躍が見受けられる。論理の
再構成は、この飛躍をあぶりだすことになる。この飛躍を、その後の完市の
俳論と照らしあわせることにより、完市の俳論の展開が把握されるととも
に、その内的な整合性を、より明らかにすることができらるだろう。

一、イメージとリアリティ

完市の「わが《イメージ論》は、まず（知覚）、（表象）、（イメージ）の
三つの概念の位置づけを確認するところからはじまっている。はじめに提
示されるのは、知覚とは何か、ということだ。

いちまいの葉を見る。視つめる。その大きさ、色彩、厚さ、その重さ、
手ざわり、縁の形状、などを視つめる。はつきり見えて、それは生き生
きとして、つねに同じに、私の前にあり、その一瞬一瞬を変えることが
ない。これが視覚であり、（知覚）の一例である。知覚は、実体的であ
り、客観性を有し、一定の輪廓をもち、その細部を保持し、観察するも
のの主観に左右されない。知覚は、完全であり、つねに外から私に与え
られている。⁽²⁾

知覚は、ここで、一般にはしばしば「現実」と称されることがらと重なり
あつているふうに見える。知覚は、「私」に対して、外来のものとして位置
づけられており、「私」の主観に左右されない確かさと完全さを有するとさ
れる。

(1) 句は、阿部『絵本の空』、二一〇頁、および、阿部『春日朝歌』、二七五頁、
および阿部『軽のやまめ』、四八四頁による。

(2) 阿部「わが《イメージ論》、九頁。

つづけて書かれるのは、表象とは何か、ということだ。

「あの葉を思え、この葉を思え」と、いま言われたとき、私は「葉」を思う。葉っぱを思う。あんな色で、こんな色で、葉っぱは薄っぺらだな、いや一寸ぼつてりしたのもあるな。緑色だ、そのはずだ、枝に鈴のようについてさらさらと鳴っているな。これが「葉」についての〈表象〉といわれるものである。表象は、模造的で、不定の輪廓をもって、細部は部分的にしか分明でない。表象は、浮動し、溶け去り、たえず新たに産出されねばならない。意志に左右され、任意に生ぜしめられ、変化せしめ得る。そして、能動性の感を与え、結局は、知覚のごとく完全ではなく、不完全である。⁽³⁾

知覚がしばしば「現実」と称されることがらに重なりあっているとすれば、表象のほうはしばしば「想像」と称されることがらに重なりあっている。表象は「私」の意志に左右され、「私」に「能動性の感を与え」るようなかたちでたえず「産出」されるが、そうした性質の裏返しとして、知覚とは逆に不完全にとどまる。知覚が外来のものだとすれば、表象は内発のものだといえる。

それでは、イメージとは何か。それはどこに位置づけられるのか。

〈イメージ〉は、心象と訳され、また像ともいわれる。そして、これは上述の表象に、むしろ、ひどく近く位置し、「感覚のあとにのこされる

(3) 同前、九・一〇頁。

(4) 同前、一〇頁。

(5) 同前、一一・一二頁。

(6) 「思い浮かべたもので、感覚的性質をもつもの。富士山を思い浮かべるとき〈知

もの」であり、それは知的心理操作ではなく、情動作業のひとつに近いと考えるべきものである。⁽⁴⁾

ここまでの流れからしても、イメージが知覚よりも表象の側に近いとされることには、大きな驚きはないだろう。ここで注目しておきたいのは、イメージが感覚の余韻のようなものとして把握され、知的であるよりもむしろ情動的だとみなされている点だ。完市は、次のとおり、心理学者の宮城音弥の言葉を文中に引用している。

「思い浮かべたもので、感覚的性質をもつもの。富士山を思い浮かべるとき『知覚』ほど生き生きしていないが、あの形、峰に つもった雪などがあらわれる。これが富士山の『心像』である」(宮城音弥)と書かれている。⁽⁵⁾

完市は書誌を詳らかに示していないが、宮城音弥編『岩波小辞典 心理学』の「心像〔英 image〕」の項に、これとほぼ同じ文面がみとれる。⁽⁶⁾

この俳論において、完市は、イメージという概念を、同時代の心理学的な知見に基づいて提示している。このことは、知覚を外来のものとする一方で、表象を内発のものとして、表象とイメージとをごく近い概念と捉えていることにも関わる。『岩波小辞典 心理学』は、「知覚」は「外部の物事(情況やその変化)を感官を通してつかむはたらき」だとしたうえで、これと「表象」との違いを、「表象はイメージであり、主観性をもち、内部

覚)ほど生き生きとはしていないが、あの形、峰に つもった雪などがあらわれる。これが富士山の〈心像〉である」(宮城編『岩波小辞典 心理学』、九二頁)。なお、「わが『イメージ論』の初出時に完市が確認することのできた最新の版は、一九六五年の第二版だった。本論ではその版を参照している。

的で、外の空間に現れず、知覚のようにはつきりとした、感性的新鮮さ（ヤスペルス）をもっていない」と説明している⁽⁷⁾。また、一九七一年（昭和四六年）に刊行された園原太郎、柿崎祐一、本吉良治監修の『心理学辞典』によれば、「心像」は「広義の表象の一部に含められることもある。狭義の表象あるいは観念とは、心像のほうにより具体性あるいは直観性をもっているという点で区別される」⁽⁸⁾。なお、『岩波小辞典 心理学』においては、「心像」は「表象と同じ」とされている⁽⁹⁾。

『俳句幻形』の著者略歴にあるとおり、完市は、精神科医を生業としていた。「わが『イメージ』論」において、術語が心理学的なものとして運用されていることも、このことと関わっているとみてよいだろう。たとえば、完市の第二句集『証』には「L・S・Dの世界」と題された作品群が収められている⁽¹⁰⁾。これらは、一九六〇年（昭和三五年）前後に、自らのLSD体験の記録として書かれたものとされる⁽¹¹⁾。この作品群について、完市は『絶対本質の俳句論』において、次のとおり述懐している。

私は、LSD投与による「自己」の変化を自ら体験したいと思った。また一精神科医としてこのLSDという物質が精神といわれるものを全体・まるごと・すべてのレベルで変化せしめてしまうものなのか、あるいは意識といわれる人間存在のどこどこ基本的な部分を撰択的に変容せしめるものなのか、を知り、確かめたいと思った。

そして、このことが「俳句」——自らが「俳句」を作す、成就するこ

とにどのように関わるのかを知りたかった。⁽¹²⁾

こうしたことから明らかなおと、完市にとつては、精神科医という生業が俳句の創作を考えることに深く結びついていた。俳論において、心理学の術語が用いられることも、驚くには当たらない。

さて、「わが『イメージ』論」の完市は、さらに、情動的なものとしてのイメージという概念を、言葉という媒体に引き寄せて、つぎのとおり捉えなおす。

〈イメージ〉は、言葉の微光である。イメージとは、言葉と言葉との衝撃の発火である。だから、それは、かつきりしていることなく、明瞭ではなく、完結するものではない。ひとつの思いに近くて、ひとつのかたち、その色と動きと、それに人間の情動、気分とを加えた一定のニュアンスであり、ゆらめきである。⁽¹³⁾

「かつきりしていることなく、明瞭でなく、完結するものではない」という点に、完市がイメージと表象の近似を見出していることは明らかだろう。加えて、イメージは、言葉と言葉との衝撃がもたらす一定のニュアンスとして再定義される。完市は、ここから、このイメージを俳句の生成にかかわる主題として論じていくことになる。

(7) 同前、一二四—一二五頁。
(8) 園原ほか監修『心理学辞典』、二〇〇頁。
(9) 宮城編『岩波小辞典 心理学』、九二頁。

(10) 阿部『証』、一三二—一四四頁。

(11) 『阿部完市俳句集』の年譜によれば、完市のLSD体験にともなう作句

(12) 阿部『絶対本質の俳句論』、六六頁。

(13) 阿部『わが『イメージ』論』、一〇頁。

〔原文ママ〕
そして、このニユモンスを、ゆらめきを、その不完全性を書き、本来的にある人間の精神作業の不安定さ——不安——を定着させる作業。これが一句を作す、創る、ということになる。(14)

一句を創作するということは、不完全なものとしてのイメージを書くことによつて、そこに人間の不安を定着させる作業だということだ。不安定なものが、書くことによつて、定着される。肝心なのは、この定着ということだ。完市は、ここまでのことを、次のとおりまとめている。

イメージとは、存在のひらめきであり、気分であり、はぐらかしであり、だまらかしであつて、それを書き切ること、その不穏と微動とを書き切ったときに生成される一種のたしからしさ——リアリティ——、それを書き切ること、それが一句を書き、完成させるということである。(15)

情動的なものとしてのイメージは、それ自体では不完全なゆらめきだ。しかし、だからこそ、それは人間の精神作業の不安定さを表現しうる。そのようにして、それは人間の存在に関わる。ただし、それは、言葉と言葉との関係のうちに生じるものでもある。したがつて、それは言葉の連なりのおえに書き切ることができる。それを書き切ると、そこから、不安定なイメージは、一種のたしからしさを持つようになる。そのたしからしさが、ここではリアリティと呼ばれている。一句を完成させるということは、要するに、イメージにリアリティを与えるということになる。

(14) 同前、一〇頁。
(15) 同前、一〇頁。
(16) 同前、一一頁。

ところで、ここでいうリアリティとは、写実主義的な意味におけるそれと、どの程度まで合致するものだろうか。

そこにあるもの、具体的に、そこにある木、枝、家、窓などの風物、臨場感、懐旧、不安、悲哀、感傷などの心象、情動を、そのままに書く。正直に、私は、枝を揺すり過ぎる風、かつての或る日の或る時刻での悲傷の風などを、ひとつひとつ、一言一言、書いてみる。そこに、ひとつのいかにも「……らしい」世界が書き止められる。ひとつの情動的予定に従つての一心象風景が書かれて行くことになる。イメージは、ひとつの書かれた言葉、その言葉の連続を、配置と数とリズムなどによつて、生きるようになる。そして、そこに、作者が生きて、作品と名づけられるものが生まれ出てくる。そして、これが第一歩である。素材に密着している——素材に直接支配されている段階での——ひとつのイメージ形成である。(16)

この一節を読むかぎり、完市は、「いかにも「……らしい」世界」という表現において、写実主義的なリアリティをも、ひとまずは一種のリアリティとして認めているかにも思える。たしかに、「ひとつの思いを、ひとつの感動を書きつけるとき、私達は素材を必要とし、素材を利用する」(17)。「風の流れ方、その方向、その風の中に居る、あるいは、在るものによつて、その感じている風のことを書く」とする「こと、それを「書かずにはいられなくなる」ことは、「俳句の動機であり、俳句への意志であり、生きている一つの証拠固めである」には違いない(18)。ただし、これはあくまで「第一歩」

(17) 同前、一〇・一一頁。
(18) 同前、一一頁。

にすぎない。

「——らしい」世界は、あくまでも第一歩であり、はじめてであり、それゆえに、まだ存在ではなく、完結ではない。「——らしく」書くこと、あなたと私の相言葉である言葉、ただの交渉のためにある言葉、あなたと私の双方にもたれかかっている言葉、その言葉ではイメージは書き切れない。(19)

完市は、このことを、端的に「イメージは、相言葉ではない」と表現している(20)。作者と読者が分かりあえるように、あらかじめ用意された言葉によつて書いているかぎりには、イメージを捉えることはできない。だから、完市にとつて、作品は、素材に直接支配されている段階においてもすでに生まれ出でくるが、生まれ出るままに完成することはない。こうしたイメージの形成は、いまだ素材に直接支配されているものとして、相対化されている。完市は、イメージを書くということを、次のとおり一般化する。

イメージを書く、ということとは、実は、自らの情念を、自らの不安定を、自らの存在の微光を、自らの不安を述べ、書いてゆくことである。そのことを書き切ること、そのことを、まず自らに、ある確定を与えること、書くことによつて、それがまず作者に確実に在るようにすること、書かれ切ったそのとき、ひとつのリアリティを所有するようにすること。それがイメージの完成であり、一句の形成ということである。(21)

(19) 同前、一四頁。
(20) 同前、一四頁。

こうしたイメージの完成のためには、素材の支配を抜け出さなければならぬ。だから、それは一般的な「写生」とは断固として区別されなければならない。

イメージの浮遊性と非完結性を直視しないで、素材から演繹的に分析的に、あり方を、視覚、聴覚をとおして、ぬり絵に彩色するとき、常凡の写生は、一句を作し得ない。それは、五七五と季語などを纏っているだけの、ひとつの屍だ。そこには、呼吸という、生という、ひとつのイメージの生体があり得ない。(22)

しかし、素材から出発しながらも、「写生」とは区別される創作とは、また、それによつて生じる句とは、どういったものなのか。この問いに答えるためには、これ以上、いたずらに理論ばかりをなぞっていくわけにもいかない。次章では、完市がこの「わが『イメージ』論」において再現している具体的な創作の過程を精査していく。

二、一句の生成

完市は、イメージを知覚よりも表象に近いものとして位置づけたうえで、一句を書くということ、元来不安定なイメージを言葉の連なりに定着させることを通じて、それにリアリティを与え、自己の情動を表現することだと捉えていた。本章では、つづけて、「わが『イメージ』論」に示されている例をもとに、その具体的な生成の過程を検討していく。

(21) 同前、一二頁。
(22) 同前、一五頁。

とはいえ、この完市の論において示されている具体的な句は、ただ一句だけだ。この論に書きこまれている俳句は、ほかには一句もない。その句は、次のとおり、風を見る、というひとつのフレーズから引き出される。

風を見る、風を見ている。私はどうして見ているのか、風の、また、風によつての周囲の状況の変化、木々の小枝のざわめき、葉の揺れ、色の変転、影の動揺などを見るのではない。ただ、風を見る、風を見ている、ということ、むしろ、風という、自らの中の風という言葉と、その言葉の機能を見ている、そんな事態。それ以上の単純さの在りようがない心のありさま、風を見る、風を見ていること。それを心の中に、私の中にかつきりとあらしめたい。私の、風を見ることを、私の心の中に定めたい。イメージを書き、より明確なイメージとして、ゆらめき動き、形として不安であり、無色である、そのことをたしかめて置きたい。

「風を見る」と書き、つぎに、なにを書くか、今、目の前にゆれ動いているものよりも確かなもの、私にとつてより私の心のものとしての確定的なもの、を探す。探すために書く、言葉として、私の在り方の隙間から洩れ出てくる言葉を書く、いろいろ書く。風、吹く、見える、風立つ、きれいに吹く、淋しく吹く、林が動く、信州、野分、風が曲る、道を吹く。見る、ふらりと立つて見入る。手にもつて見る、ぶらさげてみる。風を見る、ぶらさげてみる。「風を見る、ぶらさげて見る」、このとき、ひとつの質感、なにかの影が私に見える。イメージがちらりと形を見せ、残りたい、在りたい、と言う。私は、その言葉を信用する。つづいて書く、ぶらさげる、紐、人間の絆、悪心、嘔気など、ぶらさげる、きれいにぶらさげる。もの、命名されることのないなにかが手にある。

なにか、風のなにからしい。信号だ、風への知らせだ、風からの知らせだ。風の合図だ、私の合図だ、きれいな合図だ。そして、私が、ここに在るようだ。在ることができる。ふしぎに在る。きれいな、合図をぶらさげて、風を見ている。それが、いま、私が在ることだ。風の中に在る、私、だ。

風を見るきれいな合図ぶらさげて

阿部 完市⁽²⁾

この句は、完市の第四句集、『にもつは絵馬』に、《風をみるきれいな合図ぶらさげて》⁽²⁾というかたちで、一九六九年（昭和四四年）の作として収められている⁽²⁾。論を書くにあたって、近作のなから例を挙げたことだろう。完市は、論を書きながら一句を作ったわけではない。あくまで、創作過程を思い返しながら書いているにすぎない。

とはいえ、創作のなりゆきを示したうえで、一句をそのあとに示すという順序は、たんに思考の過程をたどるといふ以上の意味がある。この提示の順序によつて、句に先立つて置かれた一連のくだりは、一句の解説とは区別されることになるからだ。

イメージは、また内容ではない。イメージは説明ではない。イメージは、形を象るものであるはずで、直観のはるかうしろを走っている説明、分析といったものの作業から得られる散文様のものではない。散文的な説明、蛇足を全く必要としないで、表現と直接に、密接に結合して、ひとつの思いの確実さであり、本来的な開示作用を所有している、説明に

よる内容よりもはるかな現存であり、実存である。(25)

一句のなりたちを説く一連の言葉は、したがって、その句のイメージそのものを打ち明けるものではない。あくまで、はじめはふたしかなイメージ、移ろいやすい不確かなイメージが、言葉によって定着し、作者にとつてひとつのリアリティを獲得するまでの過程を、外観としてなぞったものにすぎない。「風を見る」とはどういうことか、「きれいな合図」とは何か、といったことは、句のあとではすべて偽のものになる。一句は、それとして成つてしまえば、あとは《風を見るきれいな合図ぶらさげて》という言葉の連なりが喚起するひとつの「ニュアンス」以上のものを伝えることはないからだ。右のことを踏まえて、ここからは、完市がどのように創作過程を文章に再現しているか、たどりなおしつつ、確かめていく。

まず、「風を見る、風を見ている」という行為、状況が、主題として、何かうわごとのように提示される。すかさず「私はどうして見ているのか」と問われていることからわかるとおり、このイメージはいまだ不安定なものだ。「どうして」とは、「なぜか」すなわち理由を問うているのではなく、「どのようなして」すなわち方法、手段、様態を問うているのだろうか。続きに、その答えが書かれている。「風を見る」というのだから、「風の、また、風によつての周囲の状況の変化、木々の小枝のざわめき、葉の揺れ、色の変転、影の動揺などを見るのではない」、この言葉の連なりが喚起しなければならぬのは、「ただ、風を見る、風を見ている、ということ、むしろ、風という、自らの中の風という言葉と、その言葉の機能を見ている、そんな事態」のほゞだということになる。「風を見る」ということは、完市にとって、「それ以上の単純さの在りようがない心のありさま」としてある。これ以上

単純化できないありさまを、この言葉は捉えている。したがって、一句はこの言葉から成り立つことになるだろう。しかし、これはあくまでほんまのイメージにすぎないから、依然として不安定なままだ。ここに、「私の、風を見ることを、私の心の中に定めたい。イメージを書き、より明確なイメージとして、ゆらめき動き、形として不安であり、無色である、そのことをたしかめて置きたい」という願望がおこる。ここまでの流れは、第一章に確認した一句を作ることの動機の説明と合致している。

「風を見る」という言葉は、完市にとつて、これ以上単純化できない主題だから、一句にそのまま組みこむほかはないだろう。だから、このイメージをより確かなものにするためには、まず「風を見る」と書いたうえで、「つぎに、なにを書くか」が問われることになる。イメージを確かなものにしてくれるそれは、「私にとつてより私の心のものとしての確定的なもの」のほゞだ。しかし、手元にある「風を見る」というイメージはいまだ不確かなものにすぎないのだから、この問いの答えは手探りで求めざるをえない。

だからこそ、「探すために書く、言葉として、私の在り方の隙間から洩れ出てくる言葉を書く、いろいろ書く」ということになる。完市は、ここで、「風を見る」というフレーズに含まれる二つの自立語を軸にして、言葉を探していく。

「風」という言葉からは、「吹く、見える、風立つ、きれいに吹く、淋しく吹く、林が動く、信州、野分、風が曲る、道を吹く」といった言葉が導かれる。一連のなかに「きれいに吹く」という言葉があることに注目しておきたい。完成した句は《風を見るきれいな合図ぶらさげて》なのだから、ここで、一度、完市の連想は彼の求めるリアリティをかすめている。しかし、「風の側だけからでは、求めるイメージは確かなものになつてくれない。それは

「風」のイメージにすぎず、「風を見る」ということのイメージではないからだ。

つづけて、「見る」という言葉から「ふらりと立って見入る。手にもつて見る、ぶらさげてみる。風を見る、ぶらさげてみる」といった言葉が導かれるに至って、はじめて「ひとつの質感、なにかの影が私に見える。イメージがちらりと形を見せ、残りたい、在りたい、と言う」に至る。「私は、その言葉を信用する」というが、いつさいは内的な営為なのだから、この対話は疑似的なものにすぎない。

完市は、彼が信じられる言葉を見つけた。それが「ぶらさげる」という語だ。完市は、ここからさらにイメージを確かなものにする言葉を導こうと試みる。「紐、人間の絆、悪心、嘔気など、ぶらさげる、きれいにぶらさげる。ぶらさげるといふ動作の対象を探りながら、「風」から導かれた「きれい」という言葉が、「見る」から導かれた「ぶらさげる」という言葉と有機的に結びあわされて、ひとまず「きれいにぶらさげる」となる。しかし、「ぶらさげる」といふ動作は、やはり対象を定めなにかぎりは、イメージを確かなものにしてくれない。しかし、その「もの」は、「命名されることのないなにか」と捉えられる以上、実質よりではなくその役割によって言いとめるほかはない。そこで、「信号」ということが見出される。

「信号」は、つづけて、次のとおり言いかえられる。「風への知らせだ、風からの知らせだ。風の合図だ、私の合図だ」。しかし、こうした言いかえができる以上、向きや所有は、この「合図」にとつて本質的ではない。そこで、この「合図」という語に「きれい」という言葉が結びつくことになる。「きれいな合図だ」。ここに至って、完市はようやくイメージがリアリティを持ったことを実感する。「きれいな、合図をぶらさげて、風を見ている。

それが、いま、私が在るといふことだ。風の中に在る、私、だ。私が「在る」という実感は、イメージがリアリティを獲得したことのしるしとなる。

「私」とイメージとの主客は、このとき判然としなない。

イメージを書いた、イメージに書かされた。私を使ってイメージが自らを書かした。私が、なのか、私を、なのか。私が在るのか、私を在らしたのか、不分明ではあるが、私にとって、なにかの定着感、定着感が生まれている。そのことで、私はイメージを書いた、と思う。(26)

イメージがリアリティを持つとともに、「私」がそのイメージとともに「在る」ようになる、ということなのだろう。完市の示した具体例において、「風を見る」という言葉がまずあり、そこからイメージが輪郭づけられていくということは、イメージを「言葉の微光」、言葉と言葉との衝撃の発火」と捉えていたこととも合致する。言葉が先にあり、そこからイメージが確かなものとして定まっていくという捉えようは、高柳重信が一九七〇年（昭和四五年）六月の『俳句』を初出とする「書き」つつ「見る」行為に「これは冗談ではなく、『落子』以後の僕は、まさに文字どおり、言葉を書くだけであり、そして、きわめて稀に、そこに書き並べられた言葉のなかに、何かを「見る」だけであった」と書いていることにも通じる(27)。同時代の俳論にみられる、ひとつの傾向といつてよい。

くりかえすが、完市は論を書きながら句を得たわけではない。「きれい」ということにまつわる紆余曲折なども、完成した句のかたちから遡って、いかにもそれらしく考えられたことかもしれない。とはいえず、完市の論にしたがうかたちで一句が書かれうるということは、いずれにせよ、具体例に即

して、たしかに説得的に示されている。完市は、また、次のとおり記している。

イメージは、ひとつの精神作用である。しかし、作句上のイメージは、言葉と作者との間の葛藤による一形成であり、決して、単に知覚、観念などと並んでいるのみの主観的精神現象ではなく、イメージを思うこと、それは、一句のすべてを思いつくことになるのである。(28)

まさしく、「言葉と作者との間の葛藤」の再現を通じて、完市は、たしかに、作句上のイメージを思いながら、一句を思いつくしている。

三、イメージの予定性

第二章では、『風を見るきれいな合図ぶらさげて』という一句の生成の過程を再現する完市の言葉をたどり、彼の『イメージ』論の論理的な整合性を確認した。イメージがリアリティを持つようになることで、一句が完成するという論旨を追うかぎり、そこに破綻は見られなかった。

しかし、「わが『イメージ』論」には、完市が具体的な句に即して書いていたことからは、必ずしも説明されることが書かれている断章がある。

イメージは、書かれてから、独自であり、新しくあり、しかも、すぐつぎに、もうひとつの歩み、予定性を所持していなければならない。イメージは、リアルに書き切られたときに、必ずつぎの予感を内臓している〔原文ママ〕ある予感にふるえている。それは、そのイメージの確固とした基盤、姿

(28) 阿部「わが『イメージ』論」、一六一―一七頁。

勢としてのきびしさ、たしからしさの上にあつて、つぎへ、つぎへの予感を、作者に読者に与えつつけるようになる。だから、イメージは、確かであればあるほど未来をもつ。確実であるから、確実な歩みを予感し、主張する。作者に読者に、たしかな方向を指示する。イメージは、だから、ひとつの未来性と方向性を示して、その作品のひらめきと開示を明示する。イメージは、書かれ定着し、完結すると同時に、つぎへの方向と歩みを提示する。イメージは、この性質の存在によって、一句に、在ると言われ、見事と言われ、美しいと言われる。(29)

完市によれば、書かれたイメージは「予定性」を備えている。それは、作者だけでなく、読者に対しても、「ひとつの未来性と方向性を示して、その作品のひらめきと開示とを明示する」という性質だと捉えられる。そして、この「予定性」は、イメージの存在そのものに関わるとともに、イメージの美的価値にかかわるとされている。しかし、なぜ「イメージは、書かれてから、独自であり、新しくあり、しかも、すぐつぎに、もうひとつの歩み、予定性を所持していなければならない」のか、なぜ「イメージは、リアルに書き切られたときに、必ずつぎの予感を内臓している」といえるのか。「確実であるから、確実な歩みを予感し、主張する」という一節も、この「予定性」の由来を論理的に説明しているとはいいがたい。

「予定性」の由来を説明しようとする断章は、「わが『イメージ』論」のうちに、もうひとつ見受けられる。

イメージは、人が結ぶものではない。イメージは、言葉が人に結ばせるものである。

(29) 同前、一四一―一五頁。

一句のイメージは、それゆえに、動いて、つねに、つぎを見ようとする、その確かな姿そのもの、ということなのである。(30)

ここでも、一句の「動いて、つねに、つぎを見ようとする」性質は、書かれたイメージの確かさと結びつけられている。そのうえで、その性質の由来は、イメージというものが「言葉が人に結ばせるもの」だということに求められている。しかし、イメージが「言葉が人に結ばせるもの」だということが、どうして、それに「つぎを見ようとする」性質をもたらずことになるのか。「わが『イメージ』論」には、このことの説明が欠けている。

イメージの「予定性」は、イメージの確定と関わっている。ここで、あらためて完市のいうリアリティということに立ち返る必要がある。

第一章でたしかめたとおり、完市は、ひとがしばしば「現実」と称していることさらに、「知覚」という別の名を与えていた。それでは、完市にとっての「現実」とは、どういうことだろうか。しかし、「わが『イメージ』論」においては、そのことは充分に示されていない。

完市は、「わが『イメージ』論」の発表から四年後、一九七四年（昭和四九年）八月の『俳句研究』を初出とする「現代俳句の病巣」において、そのことを詳らかにしている。

「現実」は、作家の眼前、眼中にはない。作家を圍繞する周囲、環境には存在しない。作家という一存在のこちら、側には無い。作す、成す、それは、思いをこめて表現するという作業、表現という行為ののちに、その向こうに立ちあらわれてくる。作者が、作した、その表現という精神集中のうちに、作者の全を通過し、透過した、その後、そのあちら

側に——表現という作者の全精神作業終了の後に——立ち昇り、立ち示されてくる一精神の形が、一現実という、その作家にとってかけがえない重い新しい一存在となるはずである。つねに、その作家にとつて、ときには読者という他者にとつても、全く新しいひとつの事態——それゆえに、その一表現の前で立ちすくみ、ほうと思わず溜め息をつき、その新しい所産の内包する力に打ちすえられる、そのような一新生物、それが、作者にとつて、読者にとつて、確実にその存在を主張され、居すわられてしまう、重くはげしい「現実」である。(31)。

要するに、完市にとつての「現実」とは、一句が書かれることによつて、作者にとつていまや「在る」ことになったイメージそのものだということになる。一句を書くとは、完市にとつて、言葉に由来する姿のあやふやなイメージを、たしかな現実にするのだといえる。それは、句を作ることによつて生じる「全く新しいひとつの事態」にほかならず、作者や読者は、それによつて、この「事態」の渦中に巻き込まれることになる。このことは、また次のとおり言いかえられる。

「現実」は、このように全くふやけた日常とか、茫と眼前を通過したり、茫と在つて、ときに人の心を弄ぶ一事一物という副え物とは、まったく異なっている。人の全心の一事、一所作、一仕事という燃焼ののちに、立ちあらわれてくる——表現、という一事業、一念ののちに立ち出てくるひとつの、作者あるいは日常というもののあちら、側に見えはじめ、ひとつの重量のことが、それだけが、ひとつひとつの「現実」である。そして、表現、というひとつの精神作業によつて、何よりもまず、その

作者自身にとってのひとつの現実——現実はずねに新しくなければならぬ——を刻みあらわすこと、を作句という。⁽³²⁾

現実とは、あらかじめ眼前にあって一句に写しとられるといった類のものではない。現実とは、すでにあるのではなく、作句の営為によって、はじめて獲得されるものだ。書くことで定められたイメージは、作者と読者に現実として作用する。だから、それは「つぎを見ようとする」性質、すなわち、「予定性」を帯びるものになる。

しかし、まだ謎は残っている。「予定性」の由来はよい。それによって、イメージが「在る」とされることもよいだろう。だが、それによって、イメージが「見事」だとか「美しい」とかいわれることになるのは、なぜなのか。「予定性」がじかにイメージの美的価値に関わるとされる理由は、まだ示されていない。

やはり、「現代俳句の病巣」が手がかりになる。完市は次のとおり記している。「一句を目前にして、読者は、まず、その一句への直観を作す。いいな、だめだな、美しいな、部厚いな、かるいな、爽やかだな……等々の直観を下す。意味は、実は、それから思われる」、すなわち、「まず読んで、わかっ、うたれる——のではない。まず、うたれて、それから、わかる——それから意味を辿り、自らの直観を諾い、大きく肯定し、快い、のである」⁽³³⁾。完市は、「見事」とか「美しい」といった類の直観は意味ではないとする。それが宿るのは、「意味を超えるもの」すなわち「非意味」だ。「意味を超えるもの——非意味——が、その一句の背後に、あるいは、その中枢になければならぬ」⁽³⁴⁾。当然ながら、非意味は、同時に非論理でもある。それを、

⁽³²⁾ 同前、五五頁。傍点は原文どおり。
⁽³³⁾ 同前、五六頁。

完市は「無形」と称する。「無形のかたち」という非論理を、無論理を、私は私の「現実」とする。それが「無形」と称されるのは、イメージというものが元来はつきりしないものだからだ。それが「かたち」を持つに至るのは、一句を書くことが、それにリアリティを与え、それを「現実」にするからだ。完市は、すでに「わが《イメージ論》」において、「イメージは、想像という作用によってなされ、言葉と結びついで、そして、また観念の手前にある、ひとつの情念的作用である。ゆえに、イメージは、説明をもっとも忌み嫌う」としていた⁽³⁵⁾。イメージには、意味を超えて、何らかの美的価値が伴う。しかし、それが定まるのは、それが一句のうえで「現実」となり、「かたち」を得たときにかざられる。だから、美的価値は、イメージが書かれることによって生じる「予定性」のうちに、はじめて判断される。

おわりに

ここまで、完市の俳論をたどりなおいし、その飛躍を補いながら、彼の理路を再構成してきた。

完市は、心的な現象として、まず知覚と表象とを、主体にとって外来のものか、内発のものかによって区別し、そのたしかに違いを見出す。そのうえで、主体にとって内発の、ふたしかなものとしてある表象にごく近いものとして、イメージという心理学的な概念を提示する。そのうえで、一句を作ることは、こうしたイメージを、言葉を通じてたしかなものにする다고捉える。それによって、イメージは定まり、リアリティを帯びる。ここまでのことは、「わが《イメージ論》」において、充分に説明されていた。《風を

⁽³⁴⁾ 同前、五六頁。
⁽³⁵⁾ 阿部「わが《イメージ論》」、一六頁。

見るきれいな合図ぶらさげて」という一句が生まれた過程の再現も、この点では、きわめて説得的だった。

しかし、作句上のイメージが、書かれることによって、「つぎへの方向と歩み」を示す「予定性」を帯びるのはなぜか、また、この「予定性」が、イメージの存在だけでなく、その美的価値にも関わるのはなぜか。これらのことは、「わが『イメージ論』」においては、詳しく書かれておらず、論理に飛躍があった。四年後に発表された「現代俳句の病巣」は、「わが『イメージ論』」にみられる論理の飛躍を埋めあわせる俳論として、位置づけることができる。それによれば、イメージは、書かれることによって現実となり、作者や読者に対して、全く新しいひとつの事態として迫ってくるからこそ、「予定性」を帯びることになる。また、本来、非論理の無形のものとしてあるイメージは、非意味としての美的価値を帯びるが、その価値がたしかなものとして定まるのは、イメージが書かれて現実となるときにほかならない。したがって、イメージの美的価値は、それが「予定性」を帯びたときのみ、そのなかにおいて見定められる。こうして、イメージの「予定性」はその美的価値と不可分だと考えられることになる。

完市のイメージ論の特色は、言葉を、イメージの価値を伝えるものではなく、イメージの価値を定め、生みなすものと捉えたことにある。ここには、「写生」からの転回という同時代的な傾向が、はっきりと示されている。

引用・参考文献一覧

阿部完市『証』、『阿部完市俳句集成』、沖積舎、二〇〇三年、一〇九・一五二頁。

——『絵本の空』、『阿部完市俳句集成』、沖積舎、二〇〇三年、一五一・一二

二〇頁。

——『軽のやまめ』、『阿部完市俳句集成』、沖積舎、二〇〇三年、四三五・五一〇頁。

——『現代俳句の病巣』、阿部完市『俳句幻形』、永田書房、一九七五年、五四・六二頁。

——『絶対本質の俳句論』、邑書林、一九九七年。

——『にもつは絵馬』、『阿部完市俳句集成』、沖積舎、二〇〇三年、二二二・二五七頁。

——『春日朝歌』、『阿部完市俳句集成』、沖積舎、二〇〇三年、二五九・三二二頁。

——『わが『イメージ論』』、阿部完市『俳句幻形』、永田書房、一九七五年、

九・一七頁。

阿部完市編『阿部完市年譜』、『阿部完市俳句集成』、沖積舎、二〇〇三年、五二一・五三二頁。

園原太郎、柿崎祐一、本吉良治監修『心理学辞典』、ミネルヴァ書房、一九

七一年。

高柳重信「書き」つつ「見る」行為』、『高柳重信全集』、第三卷、立風書房、

一九八五年、一七五・一八三頁。

宮城音弥編『岩波小辞典 心理学』、第二版、岩波書店、一九六五年。